

一瀬先生の、人生を変えた一冊。

「人間の心を探求するー私と心理学」

宮城音弥著（一九七七年刊）



Q. この本はどんな本ですか？

この本は表紙が色褪せていて、年代を感じさせるよね。ぼくが大学1年生の頃に読んだ本です。「人間の心を探求するー私と心理学」というタイトルで、宮城音弥先生の自伝のような、自分がどうして心理学と出会って、どうやって心を探る方法を研究してきたかが書いてあり、とても面白く読んだことを覚えています。これは読んでから知ったのですが、宮城先生は東工大の先生だった。僕が学生の時には、もういらっしゃらなかったけど、この先生が東工大にいたのかという点でも興味を惹かれました。

フロイトとかの精神分析を紹介しているところには、ヒトの性格分類とか精神とかを幼児体験などで分析しようとする考え方が書いてあり、なんだか僕には、その考え方があまりしっくりこなかった。化学が好きだったので、もうちょっと物質としてメカニズムを知りたいなというところがあった。

宮城先生は心理学者だけれど医師の資格も持っていて、生理学をベースとしたような形で、心を理解しようとしていた。今では実験心理学と呼ばれる分野があるけれど、そういう分野は当時なかったから、心理学に実験科学的なアプローチをしているところに強く興味を惹かれました。戦中から戦後の頃の東工大も出てきて、東大はすごい権威主義だったけど東工大は自由な校風であったことが書かれていて、そういう学校なんだって（笑）思ったことを覚えています。ぼくは、高校の頃から大学の名前で威張るような権威主義は嫌いだったので、東工大はいいなど。ただ、この本を読んだから心の研究をしたいと思ったわけではなくて、以前から心理学には興味をもっていたから手に取った本なので、人生を変えたかどうかは正直分からないけど。

Q. どんな本を読むのがいいですか？

本屋さんに出かけて、パラパラって読んでみて面白そうと感じる本を探すのがいいと思う。ネットで検索すると、どうしても自分の興味の分野に偏る傾向がでてしまうので、新しい出会いは本屋さんや、図書館で。

オススメの書籍は
・「嫌われる勇氣」 岸見一郎・古賀史健 著 （ダイヤモンド社）
・「科学者という仕事 - 独創性はどのように生まれるか -」 酒井邦嘉著 （中公新書）

「嫌われる勇氣」はアドラー心理学の入門書であり、対人関係の悩みを考えるのに新しい見方を教えてくれると思う。

「科学者という仕事」は、研究室に所属してからでないと実感できない部分があると思いますが、研究をすでに始めている学生さんたちには多くの示唆を与えてくれると思います。

どういう自分になりたいのか。自分ってものを考える。

Q. 研究内容をざっくりと教えてください！

私が、一番興味があるのは、人間の” ころ” です。心は脳の活動によって変化しますが、脳の活動で何が変わると、感動したり、嬉しかったり、悲しかったりするのかわ、そのメカニズム、「心の分子メカニズム」を知りたいというのが一番の研究目標です。

これでは漠然としているので、もう少しフォーカスを絞ってという『ドーパミンの働き、作用の仕方、脳の中でドーパミンがどうやって調節されているのかということ』を解明すること（ドーパミンというのは脳の中で神経伝達物質として働いている化合物）というのが研究の1つの目標です。もう1つ、ビオプテリンというドーパミンを作るのに関わっている化合物の生理作用について明らかにすること。ビオプテリンという化合物はドーパミンを作るのに必要ですが、それ以外にも幅広い生体機能に関わっているので、ビオプテリンの生理機能や病態での代謝変化の解明というテーマを、もう一つの柱として研究しています。

Q. なぜ本を読むのが大切なのでしょう？

自然界において多様性が大事ということが言われますが、どうして多様性が大事かわかりますか。1つの種だけでも、優れた種が生き残っていればいいじゃないか、という考えの人もいます。ただ、一時的にはそれで問題が起きない場合もありますが、生物の集団として考えた場合、非常に脆く弱くなってしまう、滅びる危険も高くなります。

いろんな人がいて、いろんな考え方、カルチャーがあって、それを包含できる社会が、結果的に多くの人が暮らしやすい良い社会となります。私たちが普段の生活の中で知り合える人、出会える人はそれほど多くありません。だけど、本を読むことでいろいろなことを疑似体験できる。ノンフィクションでもフィクションでも、今の自分の生活とは違う世界があることを知ったり、想像したりすることができる。さらに、登場人物の行動に対して、自分の感性とは異なるものの見方、考え方を知ることができる。そういった意味でも、自分の幅を拡げて、いろいろな考えも理解できるようになるために、若い時だからこそね（笑）、本を読んだ方が良いと思う。

東京工業大学生理工学院

一瀬 宏 教授
Hiroshi Ichinose

東京工業大学理学部化学科卒業後、同大学総合理工学研究科生命化学専攻に進む。当時の指導教員だった永津俊治先生が東工大から名古屋大学医学部生化学第一講座に異動したことに伴い、名古屋大学大学院医学研究科に入学し1989年に医学博士号を取得。学位取得後、名古屋大学医学部、藤田保健衛生大学総合医科学研究所に勤務し、ドーパミン生合成酵素、および、ビオプテリン生合成酵素に関する生化学・分子生物学的研究を続ける。その間、1994年11月から1年半フランスStrasbourgの研究所に留学し、核内受容体による転写調節の研究を行う。2003年1月より東工大に勤務し、現在に至る。